

## 『今昔物語集』の引用構造

— 引用類型の提示のために —

山 口 康 子

### On the Functions of Quotations in the KONJAKUMONOGATARISHU

— For Proposal of Quotation's models —

Yasuko YAMAGUCHI

一、

『今昔物語集』全三十一巻（うち八・十八・二十一の三巻を欠き実質二十八巻）に収められている、天竺・震旦・本朝三国の説話一千余話は、その数の膨大なことにおいても、内容の複雑多岐にわたる点から他の追隨を許さぬ仏教説話集である。全巻整然たる構成を有するばかりか、各巻内部の説話配列にも「二話連接方式」と呼ばれる鎖状に連鎖する配置法が採られている。各話とも、ほんの少数の例外を除き「今昔……トナム語り伝ヘタルトヤ」という首尾の形式に整えられ、出典文献が存する場合でも、文章は『今昔物語集』特有の文体に統一されている。登場人物は王侯貴族・僧侶官僚・地

方豪族・庶民乞食などあらゆる階層にまたがる人間ばかりか、神仏の他、鬼や天狗・霊や物の怪などの人外存在および狐や蛇などの動物たちにまで及び、それぞれに物言い、喜怒哀楽を表現する。

『今昔物語集』成立当時、すなわち一一〇〇年前後の日本人にとって、いわば全世界の生きとし生けるものすべての言動一覽であったかに目されるこの説話集の表現方法の特徴の一つに、直接話法で引用される会話文の多いことが挙げられる。勿論、説話は本来語られたものであろう。『今昔物語集』においても、すべての説話は、「語り伝ヘタ」ものとして記述されているが、その中に更に、登場人物のことはそのままに引用する表現方法がしばしば採られている。一千に余る説話の中には、直接話法による引用の全くない説話

もあれば、戯曲のように全篇会話体で進行する説話もある。個々の説話の中で、登場人物自身のことばを直接引用する会話文や、その心中を述べる心中言あるいは古歌格言等の引用が、どのような表現効果を生み出しているのか、それらの引用方式に何がしかの類型が見出されるのか、類型が見出されるとすれば、精密な編集方針のもとに整然と類纂されていると目される『今昔物語集』の各巻において、それらの類型はどのように表われているのか、本稿は、これらの疑問の解明に向けての一步である。

そのための準備稿として、『今昔物語集』の天竺部・震旦部・本朝仏法部・本朝世俗部の各々を対象に、基礎的な考察を以下の四拙稿（いずれも「長崎大学教育学部人文科学研究報告」誌に掲載）にまとめた。

1 今昔物語集天竺部の引用構造（第三十二号、昭和五十八年三月）

2 今昔物語集震旦部の引用構造

——夢語り・冥途語りを中心に——（第三十五号、昭和六十一年三月）

年三月）

3 「今昔物語集」本朝仏法部の引用構造（第四十六号、平成五年三月）

年三月）

4 「今昔物語集」本朝世俗部の引用構造（第四十九号、平成六年六月）

本稿は、この礎稿を承け、『今昔物語集』における直接話法引用文の引用方式の類型を見出し、それを引用構造と名付けて、各巻各部の引用構造を比較検討した上で、直接話法引用文の表現効果を、『今昔物語集』の文体特色として把握しようと試みるものである。

## 二、

本稿における基本的な方針は次のとおりである。

(1)、テキストは「日本古典文学大系」（岩波書店）を用いる。これは取合せ本であるが、現存写本のすべてが鈴鹿本から発していることが確認されているから、鈴鹿本の存する巻は鈴鹿本に依り、古本系統の存する巻はそれに拠っている「大系本」本文を並列的に各巻等価のものとして扱うことは、本稿の目的に支障ないものと判断する。

(2)、各説話の語り口において、直接話法引用文がどのような役割を果たしているか、その内部構造を見出すことが本稿の目的であるので、冒頭「今昔」から末尾「トナム語り伝ヘタルトヤ」まで首尾完備している説話のみを直接対象とする。但し、説話の一部を欠いていても、説話としてはその大要を語り終えていて、説話の内部構造を検討するに足ると判断した説話は、検討の対象とした。

(3)、各説話には出典文献が判明しているものもある。とりわけ、天竺・震旦部においては、直接・間接を問わず何らかの典拠が存したものと考えられる。書承・口承定かにしがたいにしても、いずれも「語り伝ヘタ」話として記しとどめられているのであるから、『今昔物語集』の文章の前段階の語りの存在を想定しなければならぬが、これまでの研究により、出典文献の有無に拘らず『今昔物語集』固有の文体に整えられていることが知られている。説話の形式を「今昔トナム語り伝ヘタルトヤ」という呼応で囲いこむ方式に整えた編者（もしくは筆者群？）は、文体においても、

依拠文献の影響を微妙に受けながらも、特有の口調に語り口を統一していると考えてよいものと思われる。とりわけ本稿においては、まず、現存『今昔物語集』の説話の引用構造の解明を目的としているので、同話・類話の存在とその典拠関係については考察にとりこまないことにする。引用構造が明らかになった上でその引用類型の依って来たところを明らかにする次の段階で、出典文献については視野に入れることにする。

- (4)、地の文に引用されている①直接話法会話文と②直接話法心中言③詩歌を合わせて「引用文」と呼ぶ。偈文・經文・称名・格言・どの引用・あるいは、夢の引用などの、会話以外の引用も見られるが、『今昔物語集』本文中においては、いずれも、口頭に発せられているか心中に念じられているかが明白な事例であると判断した。従って、いずれの場合も、音声を発している場合は④、心中に想起している場合は⑤とする。和歌や漢詩についても同様の扱いをするが、文脈上、⑥⑦のいずれとも判断し難い形で引用されている場合が見られたので、特に③の項を立てた。

- (5)、文の切れ続き、直接話法引用であるか否かの判断は、基本的にテキストの指示に依るが、独自の判断に従った箇所もある。特に⑥直接話法・心話文の判定において、テキストの指示に従わなかった部分が多い。引用部分が独立した「文」と判断でき、引用助詞が添えられている箇所は、⑥として取り出している。

(例文) 例文は印刷の都合上宣命書きには従わない。所在の提示は(二十四42、四340ペ13)の如く示し、巻二十四第四十二語の用例で「大系本」四冊めの340ページ13行に存することを表わす。以下これに従う。

。心苦シク思ヒケレドモ強ニ□ガ倡ケレバ、国ニ下テモ、女御ヲ戀ヒ奉ケルニ、<sup>⑥</sup>彼ノ女御ニ御覽ゼサセムトテ、嚴キ貝共ヲ拾テ、箱一具ニ入レテ持上タリケルニ、<sup>④</sup>女御失セ給ヒニケリト聞テ、泣悲ムト云ヘバ愚也ヤ。然レドモ甲斐无クシテ、其具一箱ヲ、<sup>④</sup>「此レ、御誦經ニセサセ給ヘ」トテ、大キ大臣ニ奉タリケルニ、貝ノ中ニ、助、此ナム書入タリケル、

<sup>③</sup>ヒロヒヲキシキミモナギサノウツセガイイマハイヅレノウラニヨラマシ

ト。大キ大臣此レヲ見給テ、涙ニ噎返テ、泣ミ御返シ、此ナム、<sup>③</sup>タマクシゲウラミウツセルウツセガイキミガ、タミトヒロフバカリゾ

ト。(二十四42、四340ペ13～341ペ4)

- (6)、各説話内部における直接話法による引用文の位置づけを知るために次の手順をとる。基本的に、前四礎稿と同一の方法である。

(ア) 各説話毎に、冒頭から順次文番号を付す。『今昔物語集』の各説話はいずれも「今昔」と書き出され、ごく少数の例外を除いて「トナム語り伝ヘタルトヤ」と結ばれている。この冒頭と末尾が呼応していて、主としてケリ体本文で語られる説話本体は、どんなに長大であっても、一文(もしくは一語)相当のものであることは既に構文上の問題として明らかにされている。<sup>(注1)</sup>しかし、文構造上の問題とは別に、冒頭語「今昔」は、形式的には、登場人物や事件の時空を説明する説話本体の最初の一文として結ばれている。又末尾の常套句も、同じく説話本体末尾の一文と形式的に結び合わされている。従って、本質的には一文(一語)相当の一説話の内部を構成する文章に対して、形式的に冒頭から文番号一、

二、三……と付すことが可能である。

(イ) 次いで、前述のすべての引用文に、引用番号を付す。引用文には前述のとおり④⑤⑥の区別を立てたが、引用番号についてはその区別をせず、引用されている順に①②③……と番号をつける。引用文の内部に更に引用がなされている場合はそれぞれの内部で①②③……と二重引用番号を、更にその内部の引用は①②③……と三重引用番号を付した。引用文と一概にいつてもその内容は一樣でなく、従って表現効果も又一様ではないであろう。心中言の引用、更に、引用文の内部の引用文、すなわち二重三重の引用の構造についても、それぞれ独自に考察するべき問題であると考え、それは引用構造の類型化が可能になった上での課題として別稿を用意したい。

(ウ) 以上の方法によって『今昔物語集』全説話に付した文番号・引用番号を用いて、各説話の内部に、どのように引用文が用いられているかを図表に示し、それを「引用構造図」と呼ぶ。各説話毎に引用構造図が作成できるわけで、その図形から引用構造の類型化が可能かどうかを試みる。

# (例文)

## 巻一 佛ノ夷母、僑曇弥、出家語第十九

1 今昔、僑曇弥ト云ハ釋迦佛ノ夷母也、摩耶夫人ノ弟也。佛、迦維羅衛國ニ在マス時、僑曇弥、佛ニ白テ言ク、「我レ聞ク、<sup>④</sup>『女人精進ナレバ沙門ノ四果ヲ可得シ』ト。願クハ我レ、佛ノ法律ヲ受ケ出家セムト思フ」ト。佛ノ宣ク、「汝、更ニ出家ヲ願フ事无カレ」ト。僑曇弥、如此ク三度申スニ、佛更ニ不許給ズ。僑曇弥、此ヲ聞テ歎キ悲テ去ヌ。

6 其ノ後、又、佛、迦維羅衛國ニ在マス時、僑曇弥、如前ノ<sup>⑤</sup>「出家セム」ト申スニ、佛、又、不許給ズ。<sup>7</sup>佛、諸ノ比丘ト共ニ此國ニ在マス事三月、終ニ國ヲ出テ去給フ時、僑曇弥、諸ノ老タル女ト共ニ尚ヲ出家ノ事ヲ申サムトテ佛ヲ追テ行クニ、佛俄ニ留リ給ヒヌ。<sup>8</sup>僑曇弥、如前ク<sup>④</sup>「出家セム」ト申スニ、佛、又、不許給ネバ、僑曇弥出テ門ノ外カニ居テ垢穢ノ衣ヲ着テ顔白甚タ衰ヘテ啼泣ス。<sup>9</sup>阿難、此ヲ見テ問テ云ク、「汝デ何ノ故ニ如此ク有ゾ」ト。僑曇弥、答テ云ク、「我レ女人ナルガ故ニ出家ヲ不得ズシテ歎キ悲ム也」ト。阿難ノ云ク、「汝デ暫ラク待給ヘ。我レ佛ニ申サム」ト云テ入ヌ。阿難、佛ニ白シテ言サク、「我レ佛ニ随ヒ奉テ聞クニ、<sup>⑤</sup>『女人モ精進ナレバ、沙門ノ四果ヲ可得シ』。今、僑曇弥ハ至レル心ヲ以テ出家ヲ求メ、法律ヲ受ケムト思ヘリ。願クハ佛、此ヲ許シ給ヘ」ト。佛ノ宣ハク、「此ノ事、願フ事无カレ。女人ハ我ガ法ノ中ニシテ沙門ト成ル事无カルベシ。其ノ故ハ女人出家シテ清淨ニ梵行ヲ修セバ、佛法ヲシテ久ク世ニ住セム事非ジ。譬バ人ノ家ニ多少ノ男子ヲ生ゼルハ此レヲ以テ家ノ榮トス。此ノ男子ニ佛法ヲ修行セシメテ世ニ佛法ヲ久ク持タシムベキ也。其ソレニ、女人ニ出家ヲ許セラバ、女人、男子ヲ生ズル事絶ヌベキガ故ニ出家ヲ不許ル也」ト。<sup>14</sup>

15 阿難、又申ク、「僑曇弥ハ多ク善ノ心有リ。先ヅ佛ヲ、始テ生レ給フ時ハ受取テ養育シ奉テ、既ニ長大ニ至シ奉レリ」。<sup>15</sup>佛ノ言ハク、「僑曇弥實ニ善ノ心多シ、又、我レニ恩有り。今我レ佛ト成テハ又我レ彼に恩多シ。彼ハ偏ヘニ我ガ徳ニ依ルガ故ニ三寶ニ皈依シ四諦ヲ信ジ五戒ヲ持テリ。但シ、女人、沙門ト成ムト思ハバ、八敬ノ法ヲ學ビ行フベシ。譬バ水ヲ防ニハ堤ヲ強ク築テ漏シメザル也。若、法律ニ入ムト思ハバ、能ク精進セヨ」ト。

⑬ 阿難、明ラカニ佛ノ語ヲ受テ礼シテ門ノ外ニ出テ憍曇弥ニ傳シム、  
 ⑭ 汝、今ハ歎ゲキ悲シム事无カレ。佛、汝ガ出家ヲ許給フベシ」ト。  
 ⑮ 憍曇弥、此レヲ聞テ大歎喜シテ、即、出家シテ戒ヲ受テ比丘尼ト成  
 ⑯ リ、法律ヲ受ケ羅漢果ヲ得ツ。  
 ⑰ 女人ノ出家スル事、此レニ始レリ。憍曇弥、又ハ大愛道トモ云ヒ、  
 又波闍波堤トモ云ケリトナム語リ傳ヘタルトヤ。

卷一第十九語の引用構造図は次のとおりである。

(一 19・一 91 ペ 15 ～ 93 ペ 9)

引用構造図 1  
卷 1 - 19

文番号	引用番号
1	
2	①-A
3	②
4	
5	
6	③
7	
8	④
9	⑤
10	⑥
11	⑦
12	⑧-A
13	⑨
14	⑩
15	⑪
16	⑫
17	
18	
19	

(エ) 引用構造図により文番号 1 ～ x の全体の流れの中のどの位置に引用番号 ① ～ ⑫ の引用文がどのような形で表われるか、視覚的にとらえることが可能である。勿論、一つとして同一の形が表われるはずはないが、類型を見出すことは可能であった。以下、その類型について述べる。

### 三、

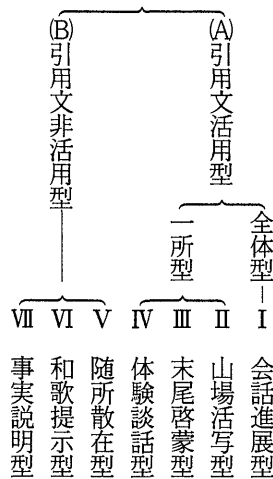
前記四礎稿によって、各部毎に引用構造図を作成し、帰納的に類型を見出す作業を重ねて来た結果、『今昔物語集』の引用構造は、大むね七種の類型に大別できることが判明した。

引用構造はまず大きく、引用文を活用して説話を語り進めるもの

『今昔物語集』の引用構造

と、引用文が必ずしも活用されていないものの二つの型に分類できる。活用型と非活用型も又それぞれに、引用構造上、類型が認められるので、次のように整理した。類型の捉え方や呼称は基本的には前四礎稿に同じいが、本稿では全体を総合的に把握して、類型の番号や名称、構成を一部修正した。

#### 引用構造の類型



引用構造 I 型から VII 型へ進むにつれて、説話の語りにおける引用文への依存度が低くなっている。これは一応、引用文の数や言語量の多寡と対応しているが、一律に比例しているわけではない。説話を語り進めるにあたっての、引用文活用の度合いである。以下、各類型について、具体的に説明する。

#### I、会話進展型

前掲卷一第十九話のような引用構造を持つ説話を「会話進展型」と称する。全一九文から成るこの説話においては、計一二文が引用文を持ち、いずれも (a) 直接話法会話文である。話の筋立ては、会話すなわち問いと答えによって展開し、あたかも戯曲を読むように

三人の登場人物の問答が記される。A 橋疊弥（佛の夷母）、B 佛、C 阿難と話者を記号化して、文章の展開を示せば、次の表のとおりである。

文番号	会話の主体、引用番号、ト書き相当地の文
1	主人公紹介
2	A「①—A」ト。
3	B「②」ト。
4	（ト書き—去る）
5	A「③」ト申スニ佛又、不許給ズ。
6	（ト書き—B去る、A追う、B留る）
7	A「④」ト申スニ（B許さずA泣く）
8	C「⑤」ト。
9	A「⑥」ト。
10	C「⑦」ト云テ入ヌ。
11	C「⑧—A」ト。
12	B「⑨」ト。
13	C「⑩」ト。
14	B「⑪」ト。
15	C「（ト書きC出てBに伝える）⑫」ト。
16	（ト書き—B出家する）
17	解説
18	教訓
19	

の進展や結着はすべて会話によって説明されている。このような説話展開の方式をとる引用構造を「会話進展型」と名付ける。

釈迦佛の夷母・

橋疊弥が出家を發意するが女性の出家は認められず嘆き悲しんでいたところ、阿難の口添えによって本懷を遂げ、女人の出家の嚆矢となるというこの説話は、ト書き程度の地の文しか持たず、圧倒的に大量の問答が直接話法によって引用されている。事件

II、山場活写型

卷四の「優婆崛多、降天魔語第八」は、次のような梗概を持つ。

優婆崛多の説法の場には天魔が美女に変化して現われ、人々に愛欲の心を起こさせる。優婆崛多だけが本性を見破り、生花の首飾りと謀って生臭い不浄の骨を貫ねて首に掛けさせる。それをはずせずに天魔は慌て、悔い改めたので許したところ、天魔が礼として「長ハ丈ハ頂ハ紺青ノ色也。身ノ色ハ金ノ色也、光ハ日ノ始メテ出ガ如」き佛の有様を真似て見せたところ、優婆崛多は、天魔の化身したものと分つていながら思わず礼拝してしまう。この説話で、優婆崛多が天魔を降伏し衆生を利益したという事件の展開そのものは主に地の文で説明される。説話本文の提示は省略するが、文数二三、引用文数一五（④会話文一二、⑤心中言三、右図の引用番号①②④が⑤）。

引用文の大半が文番号12から18の計七文に集中して現われる。引用構造図を示せば次のとおりである。

引用構造図2  
卷4-8

文番号	引用番号
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	①
8	②
9	
10	
11	
12	③
13	④—A⑤⑥
14	⑦⑧
15	⑨
16	⑩
17	⑪
18	⑫⑬
19	
20	
21	⑭
22	⑮
23	

引用文が集中的に現われる文12から文18までの計七文で表わされている場面は、まさに天魔降伏のクライマックス、どうしてもはずすことができず、天魔の首領大自在天の力でも取れない不浄の首飾りに恐れおののいた天魔が、優婆崛多に懇願し許してもらう條であ

る。文番号7、8に引用される引用文①②は心中言で、地の文で説明されている優婆崛多と天魔の行動の心理的説明である。又、文番号21の⑭は、天魔の化身と分っていて「兼テハ<sup>⑭</sup>不礼ジト思ヒツレドモ」実際に佛の姿として眼前すると「不覺ニ涙落テ臥シテ音ヲ挙テ哭」いてしまう場面での「ヲガマジ」という優婆崛多の決意の表明であるが、地の文への埋没度が極めて高く、テキストでは引用文とはされていない部分である。

事件の背景やあらすじは地の文で説明し、事の成否のかかっているクライマックスの場面を、会話文を用いて活写しようとする表現姿勢のあらわれと考え、この引用構造の型を「山場活写型」と名付ける。説話の山場を会話文多用という表現方法で迫真的に語り、臨場感を強めているといえよう。この型においては、一文中に多くの引用文を重ね、接続助詞などで接続した長文があらわれることが多い。引用構造図2の文番号13であらわされている内容は、大自在天の力でも取れなかった首輪が優婆崛多の許しではずれたことである。

<sup>13</sup>大自在天、此ヲ見テ云ク「④―①」ト云ヘバ、云フニ随テ、

亦優婆崛多ノ許ニ来リ下テ手ヲ摺テ云ク「⑤」ト云ヘバ、優

婆崛多、「⑥」ト宣テ取去ケツ。

右往左往する天魔を降伏する場面が活写されている。優婆崛多の偉力は具体的に示され、天魔の申し出と、それに動かされ佛の姿を目前にしたいという気持が押えきれなくなる優婆崛多の姿が、会話の引用によって活き活きと描かれている。この型においては、引用文多用によって迫真的かつ詳細に語るのとは中心となる限られた場面だけであって、他の部分は地の文によって説明される。局所的な引用文の使用によって、引用効果がより高められ、山場が説話全体の中

で浮き上るように語られる、このような引用構造を「山場活写型」と呼ぶゆえんである。

### Ⅲ、末尾啓蒙型

引用文が一所に集中しているものの、山場を活写しているⅡ型とは異なる引用構造を持つ一群の説話がある。引用が説話の末尾に集中して、不可思議な事柄の拠って来る所以を、わけ知りの知恵者が一挙に説き明かす形式の引用構造を「末尾啓蒙型」と名付ける。

卷二「舍衛国金天比丘語第八」の引用構造図を示す。

引用構造3  
卷2-8

文番号	引用番号
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	①
10	
11	
12	
13	
14	②
15	
16	
17	
18	
19	③
20	
21	
22	④
23	⑤-A-B-C

舍衛国の長者の家に全身金色の男子が生まれ、金天と名付けられる。誕生時に自然に不思議な井が出現し、そこから「飲食・衣服・金銀・珍宝出来テ、願ニ随テ此ヲ取り用ス。」(一35ペ6)一方、宿城国の長者のところでも金色の女子が生まれ金光明と名付けられ、同様の奇跡が起る。長じて後二人は夫婦になり、ともども出家して羅漢果を得る。この不思議を、阿難の問いに応じて佛が説き明かすことで事はすべて明白になり、説話は終了する。

右の引用構造図によって説明すれば、金天夫妻の奇瑞は、文番号1、21によって説明され、文番号22の引用文④が阿難の質問、文番

号23の引用文⑤が佛の答である。引用文⑤は、長大なもので、二一八の説話の言語量のほぼ半ばを占める。二一八は大系本の行数で全二九行あるが、文番号1〜21が二三行、文番号22が二行、問題の引用文⑤を含む文番号23は一四行を占めている。「昔、乃往過去九十一却の時、極貧の中から持物のすべてを遊行比丘に供養した夫婦が、その功績によって天上、人中に生まれ夫婦となり福樂を受けた」と説き明かす佛のことばは、乃往過去九十一却の昔に語られた貧人夫妻の会話④⑤⑥もとりこんで複雑な構造を持ち、圧倒的に長い。

文番号9の引用文①と文番号14の引用文②は、金天および金光明の父母がそれぞれ、子どもの配偶者について思案する心中言であり、文番号19の引用文③は、金天夫妻が両親に出家の許しを乞う「父母此レヲ許セ」という簡単なことばで、両親の答えは地の文で「父母即チ許シツ」と記される。実質的な会話は末尾の阿難と佛の問答だけであるが、阿難の問いは単に佛の答えを引き出すためのものではないから、実質的な内容を持つ引用文は、⑤の佛のことばだけと考えられ、その中に二重に引用される貧人夫妻の会話が重要な働きをしている。

不思議な事件が語られ、末尾において佛がすべての謎を解明して一件落着する。佛の説明の後では何人も何事も語り得ない。言表は終わり、二一八は「今我ニ値テ出家シテ道ヲ得ル也ト説給ケリトナム語り伝ヘタルトヤ」と結ばれる。このように、説話末尾で誰か一人（おおむね佛であるが）が一切を説き明かし衆愚の蒙を啓く形の引用構造を「末尾啓蒙型」と呼ぶわけであるが、この型の引用構造においては、会話文（引用文）の占める役割は極めて大きい。説話のすべてがこの末尾の啓蒙的長広舌に収斂する。会話文の活用の一

つの類型である。

#### IV、体験談話型

直接話法会話文などの引用文を一部分に集中的に引用して、語り口に効果をあげているものの、前掲Ⅱ山場活写型ともⅢ末尾啓蒙型ともいえない引用構造を持つ説話群が見出される。ある個人の特異な体験が長々と語られる引用構造であるが、説話末尾で人々を啓蒙するわけではなく、説話内部での引用集中の位置も必ずしも一定しない。夢から悟めた人や蘇生した人が、夢の内容や冥府の様子を語る場合が多く、引用文は大むね長大で二重引用・三重引用を取りこんでいる事例もまま見られる。これら個人の体験の絶対性は極めて強力で、他者が口を挿む余地のない経験として語られるが、語る人そのものには何ら絶対性はない。従ってこの語りは説話の結末にはなり得ず、改めて結末が解説されなければならない。こういう引用構造を「体験談話型」と名付けるが、Ⅱ山場活写型、Ⅲ末尾啓蒙型との違いを明確にするため、本文に付いてみよう。

#### (例文)

##### 巻七 唐ノ高宗ノ代、書生書写大般若經語第二

今昔、震旦ノ唐ノ高宗ノ代ニ、乾封元年ニ一人ノ書生有リ、身ニ重病ヲ受テ忽ニ死ヌ。<sup>1</sup>一日ニ夜ヲ経テ活テ語テ云ク、<sup>2</sup>「我レ死シ時ニ、赤キ衣ヲ着タル冥官来テ文牒ヲ持テ我レヲ召ス。即チ、此ノ冥官ニ随テ行クニ、大ナル城ノ門ニ至ヌ。使者ノ云ク、<sup>3</sup>『城ノ内ノ大王ノ玉ハ、此レ、息靜ノ玉也。彼ノ文牒ヲ持テ汝ヲ召也』ト。我レヲ聞クニ、驚キ怖レテ我ガ身ヲ見レバ、右ノ手ニ大光明ヲ放テリ。



引用構造図4 卷7-2

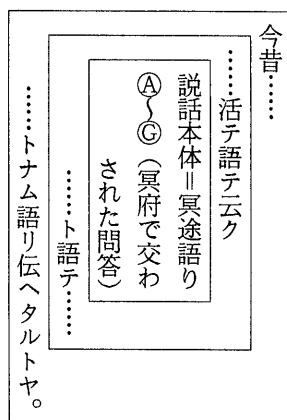
文番号	引用番号
1	①-②-③-④-⑤-⑥-⑦
2	
3	
4	
5	

其ノ光、直ニ王ノ前ニ至ル。此ノ光、日月ノ光ニ過タリ。王、此レヲ見テ驚キ恠ムデ、座ヨリ起テ掌ヲ合セテ、光ヲ尋テ、此レヲ推シテ門ヲ出デ、我レヲ見給テ、問テ宣ハク、『汝デ、何ナル功德ヲ修シテ、右ノ手ヨリ光ヲ放テルゾ』ト。答テ云ク、『我レ、更ニ善根ヲ不修ズ、亦、光ヲ放テル故ヲ不悟ズ』ト。王、此レヲ聞テ、城ノ内ニ還リ入テ、一巻ノ書ヲ換ヘテ亦、門ニ出デ、歎喜シテ我レニ語テ宣ハク、『汝デ、高宗ノ勅命ニ依テ大般若經十巻ヲ書写セリ。右ノ手ヲ以テ写シニ依テ其ノ手ニ光明有ル也』ト。我レ、此レヲ聞ク時ニ、其ノ事ヲ思ヒ出セリ。王ノ宣ハク、『我レ、汝ヲ放ツ。速ニ可還シ』ト。其ノ時ニ、我レ、王ニ申サク、『忽ニ来ツル道ヲ忘レタリ』ト。王ノ宣ハク、『汝デ光ヲ尋テ可還シ』ト。然レバ、王ノ教ヘニ随テ、光ヲ尋テ還ルニ、旧宅ニ近付ク。其ノ時ニ、光失セテ、我レ活ル事ヲ得タル也』ト語テ、涙ヲ流シテ泣キ悲ム。其ノ後、所有ノ財宝ヲ弃テ、大般若經百巻ヲ書写シ奉レリ。

此レヲ以テ思フニ、国王の仰セニ依テ不意ニ一帙ヲ書ケル人ノ功德、猶シ如此シ。何況ヤ、心ヲ蔽シテ一部ヲ書キタラム人ノ功德可思遣シトナム語リ伝ヘタルトヤ。

卷七第二語の引用構造図を次に示す。見て

のとおり、きわめて単純な引用構造になっている。文番号1で主人公が紹介されるや、直ちに語り始め、①～⑦の計七例の二重引用文を連続的に提示しながら、長々と冥途の体験を語り続ける。語り終えると後日の行動が記され、教訓を添えて説話が終わる。卷七第二



語の説話内容は、書生の冥途語りに尽きるが、文番号4、5がなければ説話として終息しない。いわば上記のような二重の縁縁に縁取られて説話が語られるわけである。

この型の引用構造においては、Ⅲ末尾啓蒙型のように、末尾近くに引用文の集中が見られる場合もあるが、それによって説話が終焉することはないのが特徴であり、Ⅲ型と異なるところである。Ⅱ型の山場活写とは異なることは瞭然であろう。

以上、Ⅰ～Ⅳの四類型は、引用文が比較的多用され、説話の語り口には何らかの積極的な役割を果たして、引用文が活用されているものである。前述のとおり『今昔物語集』の一千余話の説話のすべてが引用文を活用して語り進めているわけではない。次に、引用文が活用されているとは認め難い語り口の引用構造を類型化してみよう。

#### V、随所散在型

卷三「跋提長者妻、慳貧女語第廿三」を引用構造図で示せば、次の如くである。

この説話は全三二文で構成されるが、引用文は七例で、構造図で分るとおり所在は集中せず、散発的で相互に働き合っていない。引用文②④は慳貧女の行動の理由を示す心中言である。他は、慳貧女

引用構造図5  
巻3-23

文番号	引用番	文番号	引用番
17		1	
18	③	2	
19		3	
20	④	4	
21		5	
22		6	
23		7	
24		8	
25	⑤	9	
26	⑥	10	
27		11	①
28	⑦	12	
29		13	
30		14	②
31		15	
32		16	

と佛弟子・寶頭盧尊者との間にとりかわされる会話文であるが、いずれも短い単発的な願いや命令などで、筋の展開にも場面の活写にも役立っていない。

これは、跋提長者の妻、慳貧女が煎餅を惜しんで寶頭盧尊者に供養しなかったために苦を受けるが、尊者の取次で佛に遇い教化を受けて慳貧の心を捨てたという話である。女の受苦の原因となったことば、引用文①「譬と立死給トモ我更ニ不供養ジ。」(一242ペ4)とか、女が許しを乞うことば、引用文⑤「此ノ苦ヲ免シ給ヘ。」(一242ペ13)とかは記されているが、このように短い単的なものにすぎない。引用文が連続してあらわれるのは、文番号25の引用文⑤に続く、文番号26の引用文⑥「我が力ヲ更ニ不及ズ。汝ヲ速ニ我が大師、佛ノ御許ニ詣テ問ヒ奉レ。然ラバ我レ、汝ヲ具シテ佛ノ御許ニ將参ルベシ」(一242ペ13)だけで、この説話の引用文で問答を形成しているのはここだけである。寶頭盧尊者自らもたらしした現報奇異であるが解決の力はないことを述べるだけで、この対話によって女の受苦―寶頭盧尊者の托鉢用の鉢が慳貧女の鼻の上に落ちて取り付き離れなくなるという、いささか滑稽味を帯びた事態であるが、女にとつては冗談事ではない難儀であらう―が取り除かれるわけではない。

佛の教化も単に「為ニ法ヲ説テ教化シ給フ。」(一243ペ1)と記すだけで、印象的かつ決定的に佛のことは自体を引用して説き示すわけではない。

このように、引用文がちらほらと散在はするが、説話の語り口として格別の機能を果たしていない引用構造を「随所散在型」と呼ぶ。説話の内部で部分的に引用文が場面活写や迫真性の強化に役立っているとはいえるが、説話の筋立てや内容全体に及んではないない類型である。概して引用文自体も短小な場合が多い。

## VI、詩歌提示型

經文・偈文・称名・格言等の引用と異なり、登場人物の詠じる和歌や漢詩文の引用においては、口頭で朗詠されたものか、筆録されたものか、あるいは心中想起であるのか判別しがたい文脈の中で示される事例も多い。例文についてみよう。

### (例文)

卷二十四 圓融院御葬送夜、朝光卿読和歌語第四十

<sup>1</sup> 今昔、円融院ノ法皇失セ給ヒテ、紫野ニ御葬送有ケルニ、一トセ、此ニ御子曰ニ出サセ給ヘリシ事ナド思ヒ出テ、人々哀レニ歎キ悲ケルニ、閑院左大将朝光大納言、此ナム読ケル。

<sup>2</sup> ムラサキノクモノカケテモ思キヤハルノカスミニナシテミムト

ハ

<sup>3</sup> ト。亦行成大納言、此ナム読ケル。

<sup>4</sup> ヲクレジトツネノミユキニイソギシニ煙ニソハヌタビノカナシ

サ

ト。此ナム読ケルモ哀也トナム語り伝へタルトヤ。

(四・339べ5〜10)

引用構造図 6  
巻24-40

文番号	引用番号
1	①
2	
3	
4	②
5	

この説話の引用構造図は上記のとおりである。全五文の中に二首の和歌が引用されているが、和歌の提示の方法は全く同一で「此ナム読ケル。(和歌)ト。」という形が繰り返されている。文番号1・3は、係助詞「ナム」に呼応して「読ケル」と文が結ばれている。和歌が読まれたのは、圓融院御葬送の夜であり、人々が参集している場でのこのように読みとれるが、口頭か筆記かは明確でない。この場合「読」字が使用されていることは、『今昔物語集』の漢字使用法から考えて、何の判断基準にもならない。勿論、その場で朗誦され、後に本人もしくは何人かが記しとどめたからこそ、これらの歌が世に知られ、この説話に採られ、今に伝わっているわけである。それはそれとして、説話の文章表現上の問題として、この和歌の提示の形式は、口頭とも心内詠とも判定できず、従ってa)会話文、b)心中言のいずれにも繰りこむことが不可能で、c)詩歌として別枠をたてざるを得ない。

引用文①②は、それぞれ和歌一首であり、文番号2、4の文は、それぞれ和歌一首を引用助詞「ト」で受けているにすぎない。地の文の中に和歌を引用する文型は、『伊勢物語』『大和物語』などのいわゆる歌物語をはじめ、平安和文に様々な形式が存するが、和歌に下接する引用動詞を持たず、引用助詞だけで、いわば地の文の中に和歌を投げ出すような形式で連続的に使用することは、特異な形式と考えられる。こういう引用方法では、和歌は単に羅列

的に提示されているだけで、著しく平板単調になり、引用効果を發揮できない。それぞれの和歌は、極めて独立性の高い形で説話本文に提示されている。

紙幅の都合上、和歌二首を有する比較的短い説話を例示したが、和歌を十数首から二十余首も引用しているような長大な説話においても同様の極めて類型的な引用形式をとっている。又、漢詩文や、数は多くはないが消息文、あるいは夢の引用の一部においても、同様の単調、平板な投げ出し型の引用がみられた。和歌や漢詩文などの引用文を地の文の中に投げ出すような形で列挙し、同一類型による反復引用型の引用構造を「詩歌提示型」と呼ぶ。必ずしも詩歌だけではないが、詩歌とりわけて和歌が圧倒的に多いので、この名称が実態に応じているものと考ええる。

## VII、事実説明型

『今昔物語集』の中には、数は多くはないが、引用文の全くない、あるいは殆んどない説話も存在する。語り口の型として一つの類型であって無視することはできない。例として巻四第十語をみよう。

(例文)

巻四 天竺比丘僧澤、観法性生浄土語第十

今昔、中天竺三一人ノ比丘有リ、名ヲバ僧澤ト云フ。<sup>1</sup>心ノ受タル所懈怠シテ本ヨリ愚カ也。<sup>2</sup>比丘ノ形ヲ受タリト云ヘドモ、所行一トシテ持ツ事无シ、経・真言ヲ受ケ習フ事无シテ、年来ノ間、一ノ寺ニ往シテ徒ラ二人ノ供養ヲ受テ、空ク毎日毎夜ニ罪ヲ作クル。<sup>3</sup>慙无シテ、後世ノ事ヲ不思ズ。然レバ、同ジ寺ニ住ム比丘共、

此ノ僧澤ヲ輕メ蔑テ同座ニモ不居ズ、稍モスレバ寺ヲ追ヒ出ス。  
 而ルニ、此ノ僧澤、少ノ知恵有テ、我が身ノ内ニ在マス佛ノ三  
 身ゾ功德ノ相ヲ心ニ懸テ、忘ル、時无ク昼夜ニ常ニ思フ。<sup>7</sup>如此ク  
 觀ズル間、其ノ功德自然ヲ顯ハレテ心ノ内ニ常ニ法性ヲ觀ジテ、  
 更ニ他ノ事ヲ不思ズ。如此クシテ漸ク年月積ヌレバ、年ノ老ヒ傾  
 キテ身ニ病ヲ受テ臥シヌ。寺ノ内ノ上下ノ比丘、弥ヨ此ヲ穢ナミ  
 謗ル事无限シ。<sup>10</sup>死ル尅ニ臨テ、多クノ佛菩薩、僧澤ガ所ニ来リ給  
 テ、法ヲ説テ、僧澤ヲ教化シ給ク。僧澤、心ニ随テ形ノ色鮮ニシ  
 テ起居テ佛ヲ念ジ奉ツリ、法性ヲ觀ジテ絶入ヌ。<sup>12</sup>即チ觀率天ノ内  
 院ニ生レヌ。<sup>13</sup>其ノ間ダ、光ヲ放チ香シキ香、寺ノ内ニ満タリ。寺  
 ノ内ノ諸ノ比丘、此ヲ見テ僧澤ガ所ニ行テ見ルニ、僧澤、形・色  
 鮮ニシテ端坐合掌シテ絶入タリ。<sup>15</sup>室ノ内ニ香シキ香満テ光ヲ放ツ。  
<sup>16</sup>比丘等、此ヲ見テ驚キ貴ビテ、年来輕メ蔑ツル事ヲ悔イ悲シム  
 事无限シ。<sup>17</sup>其ノ後ハ此ノ僧澤ガ所行ヲ尋ネ聞テゾ行ケル。  
<sup>18</sup>然レバ、勤メ无ク无慙ナラム比丘ヲモ「様有ラム」ト思テ、不  
 可輕慢ズトナム語り伝ヘタルトヤ。

(一・286ページ3～287ページ2)

全一八文の中に引用文は一例のみである。引用動詞「思フ」を持  
 つ心中言であるが、「様有ラム」と思う主体は不特定一般の人々で  
 あり、心中言の性格の弱いものである。場面としては、一読、明ら  
 かなとおり、「同ジ寺ニ住ム比丘共」が「輕メ蔑テ同座ニモ不居ズ、  
 稍モスレバ寺ヲ追ヒ出ス。」とか、「寺ノ内ノ上下ノ比丘」が「弥ヨ  
 此ヲ穢ナミ謗ル事无限シ。」とか、僧澤の臨終の際「多クノ佛菩薩」  
 が「法ヲ説テ僧澤ヲ教化シ給フ。」など、様々な会話場面が存在す  
 る。それにも拘らず、直接話法の形で会話文そのものを引用するこ

とをしていない。勿論、地の文で事柄を説明することによって筋書  
 きは分かる。しかし、僧澤が「法性ヲ觀ジテ絶入」り、浄土に生ま  
 れたという肝心な点については、没後、衆僧が己れの行動を悔い  
 「僧澤ガ所行ヲ尋ネ聞テゾ行ケル。」という程に強い影響力を持った  
 事実であると説明されても迫真力に欠ける。僧澤の臨終に際しては、  
 光が放たれ、芳香がただようという奇跡が起こった事を二回もほぼ  
 同文を繰り返して力説するが、眼前にその光景を浮かばせることは  
 難しく、決まり文句の羅列に終わっている。

このように、事実を説明的に述べ、筋書きを語るにとどまり、説  
 話としての語り口に格別の工夫や興趣の施されていない引用構造を  
 「事実説明型」と名付ける。引用構造図を作るまでもない単純な型  
 であるが、比較のため次の表に示す。

引用構造図 7  
 巻 4 - 10

文番号	引用番号
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	
11	
12	
13	
14	
15	
16	
17	
18	①

以上、V・VIIの三類型は、説話を語り進める上で、引用文が大き  
 な役割を果たしてはいないと考えられる引用構造である。これらの類  
 型に属する説話においては、引用文は活用されず、説話内部に散在  
 して部分的な描写に活気や臨場感を添えはするものの、全体的な影  
 響力は持たないか、引用文そのものが僅少であるか、詩歌などの特  
 殊な引用文をただ提示することを目的とするか、とにかく、説話を  
 語り進めるにあたって、引用文に依存していない。

#### 四、

一つの説話内部で、登場人物の会話や心中言を直接話法で引用する表現形式を用いる語りの類型を、『今昔物語集』一千余話を帰納する方法で七種類見出し、各類型について説明した。一貫した編集方針のもと、整然と類纂されている『今昔物語集』の各巻・各部において、これら七類型はどのように現われているのだろうか。次にそれを検討する。引用構造の巻毎の分布を、次の項目について一覧し、各巻および天竺・震旦・本朝仏法・本朝世俗各部を比較検討しよう。

##### (1) 引用文の内訳

直接話法引用文は、①会話文、②心中言、③詩歌（消息文等も含む）に三大別されること前述のとおりであるが、中でも①が圧倒的に多く、説話の語り口に強い影響を及ぼしている。②心中言が記述されるという事は、説話の語り口として、どういう事なのか、日記や作り物語とは性格を異にする説話における心中言の問題は別途考察すべき課題である。今は①会話文に比して少なくともあるが存在する③心中言が、各巻においてどの程度みられるのか、巻による多少があるのかどうか、「引用文数全体に対する心中言の比率」でとらえてみよう。各部の小計を提示して比較の便をはかる。

##### (2) 引用構造の分布

前述Ⅰ～Ⅶの引用構造の型が各巻にどのように分布しているか、検討する。前四礎稿で分析結果を示したとおり、各類型とも例示したような明確な形式で常にならわれるわけではない。二つの型の中間的な性格を示す説話もあれば、二つもしくは三つの型の特徴を合

わせ持つ説話もある。しかし大勢をみれば、各説話の引用構造は一つの型で整理することが可能であり、『今昔物語集』の引用構造は概していえばパターン化されているといえる。複雑な性格の引用構造を持つ説話については、各引用文が説話の語り口において果している役割を検討して中心となっている型を定め、それに加わる付随的な要素を持つ変型として処理した。この、いわば組み合わせ型は、實際上それほど多くない。

各説話の型については前四礎稿に示したので本稿では繰り返さず、各巻においてⅠ～Ⅶの類型の分布状況を巻毎の百分比で示す。個々の説話の所属について検討の上修正を加えた部分もあるが、百分比の数値に変動がみられるほどの大きな修正は必要なかったため、本稿では特記しない。

(1)(2)の二項目について作成した「引用構造巻別分布表」について二、三注記する。

。天竺・震旦・本朝仏法・本朝世俗の各部について小計の欄を設け、各部の比較検討の便をはかった。

。説話数の欄の数字は、各巻とも、本稿において直接対象とした語り口の内部構造の検討に耐える、首尾完備している説話の回数である。

。用例の見出されない項については空欄によって示し、0の数字を入れなかった。空欄の意味するところも考察の対象とする。

。比率は小数点三位で四捨五入した。

# 巻別分布表

15	14	13	12	11	小計	10	9	7	6	小計	5	4	3	2	1	巻	
54	45	44	40	28	174	40	46	40	48	185	32	41	35	41	36	説 話 数	
296	268	217	307	324	922	319	245	155	203	1696	339	374	281	279	423	引用文 数(ア)	(1) 引 用 文 の 内 訳
230	178	148	220	254	705	252	206	114	133	1456	268	310	255	247	376	会話文 数(イ)	
66	90	69	87	70	217	67	39	41	70	240	71	64	26	32	47	心中言 数(ウ)	
																詩 歌 数(エ)	
22.30	33.58	31.80	28.34	21.60	(平均) 23.53	21.00	15.91	26.45	34.48	(平均) 14.15	20.94	17.11	9.25	11.14	11.11	比 率 (ウ) ×100 (ア)	
14.81	4.44	4.55	12.50	14.29	21.26	40.00	21.74	10.00	14.58	29.18	46.87	34.14	25.71	2.43	41.66	I	(2) 引 用 構 造 の 分 布 (巻 毎 の 百 分 比)
		2.27	15.00		1.72		2.17	5.00		7.02			8.57	17.07	8.33	I 変型	
3.70	4.44	4.55	17.50	7.14	10.34	22.50	6.52	5.00	8.33	17.29	15.62	34.14	20.00	4.87	11.11	II	
					1.15			2.50	2.08							II 変型	
					1.15	2.50			2.08	19.45	9.37		8.57	60.97	13.88	III	
																III 変型	
31.48	51.11	40.91	2.50	10.71	24.14	2.50	19.57	25.00	45.83							IV	
16.67	11.11	6.82	5.00	25.00	3.45		6.52	7.50								IV 変型	
12.96	15.56	25.00	25.00	25.00	18.97	10.00	28.26	27.50	10.42	16.75	12.50	24.39	25.71	4.87	16.66	V	
		2.27			1.15	2.50		2.50		5.94	9.37		8.57	7.31	5.55	V 変型	
																VI	
																VI 変型	
20.37	13.33	13.64	22.50	17.86	16.67	20.00	15.22	15.00	16.67	4.32	6.25	7.31	2.85	2.43	2.77	VII	
																VII 変型	
5	5	5	5	5		6	5	5	6		5	4	5	5	5	類 型 数	

山  
口  
康  
子

# 引用構造

『今昔物語集』の引用構造

計	小計	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	小計	20	19	17	16
1033	291	37	14	39	44	45	23	12	55	14	8	383	44	41	49	38
9005	3382	348	240	470	422	403	577	211	456	182	73	3005	332	455	240	566
6669	2339	228	130	347	329	296	410	155	273	120	52	2169	262	327	157	393
2218	925	118	93	122	91	106	166	56	93	62	18	836	70	128	83	173
117	117	2	17	1	2	1	1		90		3					
(平均)	(平均)											(平均)				
24.63	27.35	33.91	38.75	25.96	21.56	26.30	28.77	26.54	20.39	34.07	24.66	27.82	21.08	28.13	34.58	30.57
22.02	25.09	32.43	21.43	30.77	29.55	20.00	34.78	16.67	12.73	42.86	12.50	12.53	13.64	19.15	4.08	28.95
5.24	9.62	2.70	42.86	12.82	6.82	11.11	8.70	16.67	7.27			2.61			2.04	5.26
16.82	30.24	27.03	14.29	35.90	43.18	44.44	30.43	8.33	20.00	21.43	12.50	9.40	18.18	17.07	6.12	7.89
2.17	7.56	8.11	21.43		9.09		4.35	25.00	14.55							
5.15																
0.09	0.34							8.33								
12.87	0.69					6.67			1.82			26.63	9.09	12.20	48.98	18.42
3.67												11.23	9.09	14.64	10.20	5.26
16.67	10.31	8.11		12.85	6.81	13.33	8.70	8.33	10.91	21.43	12.50	20.63	25.00	21.95	14.29	26.32
2.48	2.06				2.27		4.35	8.33	3.64			0.78	2.27			2.63
0.86	3.44					2.22			18.18							
11.96	10.65	21.62		7.69	2.27	2.22	8.70	8.33	10.91	14.29	62.50	16.19	22.73	14.63	14.29	5.26
		4	2	4	4	5	4	5	6	4	4		5	5	5	5

## 五、

『今昔物語集』の各説話において、(1)引用文(会話文や心中言)がどのように用いられているのか、(2)引用方式には何がしかの類型・引用パターンが見出されるのか、(3)各巻にその類型がどのように分布しているのか、という当面の問題に対して、本稿では、

(1)『今昔物語集』においては、各説話によってかなりの偏りはあるが、①直接話法会話文、②直接話法心中言、③詩歌などの引用文を活用して語り進める表現方法が見られること。

(2)引用方法を説話の語り口の内部構造として検討すると、引用文を大いに活用する引用構造として計四類型、必ずしも引用文を活用して描写を進めているとはいえない引用構造として計三類型、合計七類型のパターンを発見した。Ⅰ会話進展型、Ⅱ山場活写型、Ⅲ末尾啓蒙型、Ⅳ体験談話型の計四類型が引用文をそれぞれの方法で活用する型であり、Ⅴ随所散在型、Ⅵ詩歌提示型、Ⅶ事実説明型の計三類型においては、引用文は説話の語り口においてそれほど重要な役割を果たしていない。『今昔物語集』一千余話のうち、語りの型を分析し、内部の引用構造の検討に耐えるだけに首尾完備している説話全一〇三三話、すべてを分析し、この七種の引用構造のいずれかに分類した。

(3)各巻の類型の分布には、大きく偏りがみられ、それが各巻の表現形式の一つの特色を形成する。それは類纂の結果とも考えられ、総括的に見れば各部の特色ともなっている。七類型のすべてを見出す巻の存しないことは、逆にいえば、巻毎に特有の引用構造の偏りを有する事の現われでもある。

本稿においては、引用構造の類型の発見・提示と、巻毎の分布状況を明らかにすることで紙幅が尽きた。各巻・各部の引用構造の特色を分析し比較検討するためには続稿を期さなければならない。天竺部におけるⅢ末尾啓蒙型、震旦、本朝仏法部におけるⅣ体験談話型とⅤ随所散在型、本朝世俗部におけるⅥ詩歌提示型など、各部の特色の淵源や表現効果に言及することこそ、本稿本来の目的があるが、その第一段階として引用類型をここに提示する。

引用構造の類型化を目指して、前記四礎稿の一番目、天竺部に手を染めたのは、一九八三年のことである。『今昔物語集』全巻の説話を検討し、全体的な見地で引用類型を提示するまでに、十年の歳月を要してしまった。牛の歩みを恥じるばかりである。この間に考えの変わった点を改め、個々の説話の語り口についての判断を修正すべきは修正し、引用構造の類型を体系的に把握するよう努めた。本稿において提示した引用類型は、『今昔物語集』の各説話から帰納して得たものであるが、説話の語り口における引用文の位置づけの体系化として、他の説話集にも適用し得るものと考えている。これも又、今後の課題としたい。

## 注

1 春日和男「説話の語文―古代説話文の研究―」(50・11) 桜楓社  
その他本稿を成すにあたっては、幾多の先学の論考に負うところが大きい。引用文について説話内部における位置づけ方を類型化するという、本稿の目的に、直接かかわるものは、管見の限り、見出せなかった。紙幅の都合もあり、具体的に論文名、著者名をあげることがしなかった。記して、大系本の校訂以下、先学の学恩に感謝の意を表したい。

(一九九四、一〇、一二)